

## 「愛郷心」と「愛国心」の交錯 —1930年代前半台湾における郷土教育運動をめぐって—\*

許 佩賢

はじめに

- 第1節 1930年代台湾における郷土教育運動の担い手
- 第2節 台中州における郷土教育運動
- 第3節 重層的な郷土像
- まとめ

(要約)

本稿は1930年代の台湾における郷土教育運動を題材に、植民地政府がいかなる論理とメカニズムで郷土教育のジレンマを超え、「愛郷心」を「愛国心」へと格上げさせたのか、そして現場教師たちがいかにそれぞれの立場で自分の郷土教育の理念を実践したのかを考察した。台湾における郷土教育の担い手は中央の総督府ではなく、地方官庁となっていた。郷土調査は可変的な行政単位を範囲としていたために、それによって作られる愛郷心もそのバウンダリーを超えて愛国心へとつながりえた。一方、実際に調査に従事したのは、小公学校の教師だった。美術、工芸の郷土化、生活化を現実の郷土の振興につなげていこうとした台湾人教師がいたという事実に筆者は注目したい。また、郷土調査の項目として歴史のほかにも日常生活の多くの側面が素材となっており、歴史性を奪われた「郷土」がある種の「歴史的深度」を持たずにはいなかった。植民地とはいえども「歴史性のある郷土」は確かに存在したのであるが、それは植民地統治者のためにのみ存在しえたものであった。

はじめに

国民党政府が長らく主導してきた中国主義教育に対抗するために、本土派の改革勢力は1990年代前半から台湾の教育改革運動を繰り広げ、「郷土」をかかげて教材に台湾にかかわる内容を増やすことを当局に要求した。これをうけた台湾の教育部が1993年から1994年にかけて小学校と中学校の教育課程改革に着手し、郷土教育を義務教育課程のなかに含ませるや、各県市もそれぞれ郷土教材を編集するようになった。研究者たちによれば、国民党政権のもとで県や市が編纂した郷土教材では中国人固有の歴史文化伝承が重んじられ、紹介されている「偉人」の多くが鄭成功時代の台湾統治に関わっていた人物から選ばれているなど、台湾と中国との血縁的結びつきか、さもなければ戦後政府による台湾現代化の成果を強調していた。一方、民進党政権のもとではそれが一変して、現在の生活空間の単位（たとえば、高雄や宜蘭など）に基づいたアイデンティティーの創出に主眼を置いたり（たとえば、高雄人や宜蘭人など）、台湾人の祖先は原住民や平埔族であると強調したりすることで、「台湾人」としてのアイデンティティーの創造に注力しているという。前者の国民党政権のもとでの「郷土=台湾」が、中国文化の下位概念として位置づけられているとすれば、後者の民進党政権のもとで「郷土=台湾」は中国文化に匹敵できる同格のものとなされており、ここからも同じ「郷土」とはいえ、異なる立場によってそれぞれ異なる解釈が可能であることがわかる。ただ2000年政権交替の後、「郷土」ということばが中国文化に從属する下位概念としての「郷土台湾」を連想させようという懸念の声があがり、教育部はつづく教育改革のなかで「本土意識を各領域の教育課程のなかに融和させていく」という名目で、実質

的に「郷土教育」を教育課程からはずした。つづいて2002年に「本土教育委員会」が教育部に設置されるや、「郷土教育」論は台湾を「本土」とする「教育本土化」論に取って代わられたのである<sup>1</sup>。

このように「郷土」は、異なる権力が競合しあう焦点となり、その意味解釈は各勢力にゆだねられることになる。さらに、「郷土」はアイデンティティーとも深くかかわるために、民族主義のもっとも有効な言論手段としてみなされ、ときには排除や警戒の対象として危険視されたりもする。日本統治時代の1930年代の植民地統治者も例外ではなく、「郷土教育」を用いて台湾人の国家アイデンティティーを強化しようと試みていた。しかし、植民地時代の郷土教育運動を取り上げた先行研究は意外に少なく、たとえば2004年行政院文化建設委員会によって出版された『台湾歴史辞典』のなかにも関連項目は見当たらない。この問題に対する認識と検討はまだ不十分であるといえよう。

日本統治時期における台湾の郷土教育に対する先行研究としては、詹茜如の修士論文「日據時期台湾的郷土教育運動」が挙げられる。学校教育および社会教育の両方から郷土教育の実状に広く論及している詹は、学校教育として郷土読本の編纂、公学校課程および学校活動を、社会教育としては、青年団、部落振興会および各種地方関連活動を取り上げ、日本統治時代の郷土教育運動は台湾民衆の愛郷心を育むと同時に、台湾の郷土を「日本化」した郷土へと切り替えることで、愛郷心を愛国心へと拡大させることを目的にしていたと結論づけている<sup>2</sup>。ただ、同論文は、たしかに郷土教育に関連するさまざまな議題を網羅してはいるものの、研究対象の範囲が広がりすぎて多くの問題が未解決のまま残された嫌いがあるだけでなく、時間軸の変化が十分に配慮されていないため、日本時代の郷土教育があたかも固定されたもののように扱われてしまったり、言説レベルと実践レベルとがはっきり区別されていないなどの問題点が指摘できる。

一方、呉文星は当時の新聞や雑誌から関連記事を抽出し、郷土教育をめぐる言説を分類したが、このような分類は郷土教育と国民教育の関係に依拠したものととどまっている<sup>3</sup>。また第三期国語読本を分析し、そのなかに相当多くの郷土教材が盛り込まれていると指摘した周婉窈は、これらの郷土教材ではもっぱら「歴史が除去された」郷土が描き出されているが、それは「郷土愛」を「国家愛」へと格上げする手段として、「郷土」が統治者によって利用されたためであるとする<sup>4</sup>。

以上の先行研究を総合すれば、1930年代台湾における郷土運動は、日本本土の郷土教育運動の影響のなかで展開され、「愛郷心」を「愛国心」へと上昇させる役割を果たしたと整理できよう。本稿はこのような先行成果に基本的に同意したうえで、以下の課題を指摘したい。すなわち郷土教育論を「運動」として位置づけるからには、その運動に対する妥当な評価をくださすためにも、担い手、主張内容および実践方法など、その具体的な全体像が明らかにされなければならないのではなかろうか。このような反省に基づいて、本稿は運動史を再解明するという立場から、「愛国心」と「愛郷心」が交錯しあう結節点として「郷土」をとらえ、担い手、主張の具体的内容、そしてその実質的成果と限界について究明していきたい。

## 第1節 1930年代台湾における郷土教育運動の担い手

「郷土」という語は台湾人にもなじみ深いことばではあるものの、実際にはそれほど長い歴史を経てきたわけではない。たとえば、「郷土」という表現が現れる清代の文献はほとんど見当たらず、そのわずかな使用例も「自分の故郷」という意味でしかなく、ほかの単語と熟語をなして意味が広げられるということもなかった<sup>5</sup>。このような状況は日本統治が始まってからもしばらく続き、台湾において「郷土」ということばが意味を持ち始めるのは1930年代を待たなければならぬ。1930年に黄石輝の「怎樣不提倡郷土文学」という一文をきっかけにいわれる「郷土文学論戦」が展開されるや、黄石輝は「台湾を一つの郷土として規定すべきである」という主張を繰り広げるようになったのである<sup>6</sup>。教育の領域にかぎっていえば、台湾教育会の機関誌『台湾教育』にも、1930年まで「郷土」ということばは一つも現れない<sup>7</sup>。『台湾教育』誌上における「郷土」ということばは、1930年代に入って初めて登場する。以後、「郷土教育」は、各科目でどのように郷土教材を用いるかという問題をはじめ、さまざまな議論で取り上げられる常連となっていく。

しかし、『台湾教育』が台湾教育界全体の言論動向を代表していたとすれば、「郷土教育」に関する議論はかなり少ないといわざるをえないだろう。「郷土」ということばがはじめて登場したのは1930年4月だが<sup>8</sup>、1933年6月から12月まで各州庁の教育事情を紹介するコラムが設けられた。その内容を州別に分析すれば、台中州が6篇で最多で、台北州が2編、台南州が3篇、新竹州が1篇掲載されている。この12篇の文章がすべて「郷土」と言うことばをタイトルに含んでいるわけではないものの、その内容のほとんどは郷土教育や教育實際化に関連している。以後、「郷土」ということばをタイトルに冠した文章は、1934年に4篇、1935年に1篇、1937年に1篇現れた後<sup>9</sup>、1941年に郷土体育を提唱する文章が掲載されるまで、『台湾教育』誌上から姿を消す。1941年は台湾の学校制度が国民学校へと改められると同時に、4年生の教科課程に「郷土の観察」という科目が新設されたときでもあり、『台湾教育』もこれを受けて1941年から1943年まで「郷土の観察」に関する論述が4篇掲載したのである。いずれにせよ、1930年以後『台湾教育』誌上に現れる「郷土教育」に関連する記事は27篇に過ぎず、非常に限られていたといえよう。

『台湾教育』に頻繁に登場した台中州は、1931年に「教育實際化」というスローガンをかけ、郷土調査や郷土教育を州内で推進しはじめた。1933年、州役所に所属する台中州教育会の機関誌『台中州教育』が発行され、同州の郷土教育運動に関する論壇としての役割を果たした。創刊してから翌年の初めにかけて、「教育實際化論叢」というテーマが設けられ、州教育当局の政策宣伝を載せるだけでなく、現場教師の郷土教育に関する主張や経験談も多く掲載された。台中州当局と現場教師の郷土教育に対する熱心さが伺える内容である。また、小公学校や教育会が編集出版した『郷土誌』や『郷土調査』などの類の書籍は20種近くが現存しているが、その大半は1931年から1934年のあいだに出版されたものである<sup>10</sup>。そして実際に調査に従事したのは、各地小公学校の教師たちであった。むろん20種という数字は大したものではないかもしれない。しかしながら、調査の結果を出版という形で残していない学校の存在も考慮すれば<sup>11</sup>、当時実際に郷土調査を行なった学校数は、20校をはるかに超えるはずである。数字の大小はともかくとし

て、二、三年という短期間に台湾各地の小公学校でこれほど多くの郷土調査が行なわれたことだけでも、十分注目に値しよう。以上からもわかるように、1930年代の台湾に郷土教育運動の動きがあったことは確かに認められる。ただし、このような動きは中央の総督府を担い手としていたわけではなく、あくまでも地方州庁によって進められるものであった。その中で、台中州はもっとも積極的に取り組んでいたように見える。

日本内地の場合、明治以来の日本の郷土教育にはいくつかの文脈がある。郷土誌による歴史・地理教授、ドイツの郷土科の影響、直観教授の主張、教科書国定化による内容の画一化に対する反発としての郷土教育の主張などが挙げられる。1919、20年以降の大正新教育運動は児童の生活や体験を重視すべきと主張したが、郷土教育はちょうどそれに対応していた。1927年には、文部省が各高等師範学校、師範学校付属小学校及び各府県の小学校の郷土教育の時間や施設を調査しはじめたが、これは文部省の郷土教育に対する関心の大きさを伺わせる。1930年代以後、郷土教育運動の新しい波を迎えた日本内地では、文部省によって各師範学校に郷土研究施設費が支給されたり、民間でも郷土教育連盟が設立されて「郷土教育」関連の雑誌や書籍が多数出版されたりするなどし、各地の小学校や師範学校、地方教育会では、郷土調査、郷土資料の収集と展示、郷土読本の編纂事業などが盛んに行なわれていく。文部省の積極的な態度もあり、郷土教育運動が盛んになっていった<sup>12</sup>。

台湾の教育関係者たちはこのような日本内地の動向をどう受け止めていたのだろうか。台北州漳和公学校校長が出版した郷土調査専門書には、「ここに郷土教育が漸次勃興して、第七回全国聯合小学校教育会総会で郷土教育に関する事項が議論され、更に文部省が全国師範学校が郷土研究を奨励しましたため、俄然郷土教育熱が高まって非常な勢いを以て全教育界を風靡するやうになりました」と述べられている<sup>13</sup>。また、台南土庫公学校教師の新庄輝夫は「本島教育と郷土教育」という一文のなかに、1930年東京で行なわれた全国連合小学校教育総会での郷土教育に関する調査報告内容を写し取った後、文末に内地で出版された教育専門書十数冊のリストを付している<sup>14</sup>。当時台湾の教師たちはみづからの郷土教育論の中に、内地教育家の郷土論を多く引用しており<sup>15</sup>、ここから判断するかぎり、台湾の教師たちは内地の教育動向をかなり熟知していたといえよう<sup>16</sup>。

文部省は1930年から1931年までの2年間、各師範学校に郷土施設研究費を交付していたが、それはそもそも義務教育期間を延長する名目で組まれた経費である<sup>17</sup>。植民地台湾における文部省の職責は、台湾総督府によって代行されていたが、当時の総督府記録には師範学校宛てに特別費用が交付されたなどの記述は見当たらず、内地の義務教育を延長するための経費が植民地台湾に流用されたとは思えない。それから2年を経た1933年、台湾の師範学校規則が改正され、内地と同様に地理科のなかで「地方研究」を教授するという条文が加えられたが、台湾の文教当局が郷土教育運動に対してとった行動はそこまでである。さらに、全島規模の教育団体であると同時に、総督府の外郭機関でもあった台湾教育会も、このような郷土教育運動に対して積極的な態度をとっていたわけではなかった。

先行研究によれば、植民地台湾における郷土教育運動と関連して最も注意されていた点は、それによって育まれる郷土愛が日本の目標とする国家愛の障害となってしまうことを未然に防ぐべ

く、被植民者の自我意識や民族意識を遮断することだった。結果的に、郷土教育教材には台湾の歴史が欠落し<sup>18</sup>、郷土読本でももっぱら日本が改造した郷土の現代像だけが強調された<sup>19</sup>。このような技術的な装置によって、郷土台湾像の形成は確かに憚られたのだが、台湾の中央教育界が積極的に郷土教育運動を奨励しなかった理由もおそらくここにあったのだろう。

## 第2節 台中州における郷土教育運動

前述したように、1930年代台湾の郷土教育運動は、台湾の中央機関である文教当局や全島規模の台湾教育会によって主導されたものではなく、州以下の地方レベルで進められたが、なかでもとりわけ積極的に郷土教育運動を進めていた地域に台中州がある。

台中州の郷土教育運動は正式には、1931年に台中州の教育会が「教育實際化」というスローガンを掲げたところから始まったとされる。

台中州の教育会は台湾教育会の台中支会を前身とする。1931年に台湾教育会が社団法人として改組されるや、各州庁教育会も形式上それぞれ独立していく。このような流れのなかで、台湾教育会台中支会も台中州教育会として独立し、台中州知事はその会長を務め、事務所は台中州教育課のなかに設置された。同会は毎年一回台中州教育総会を行なったが、台中州下の教育関係者および各学校教師からなる会員は設立当初よりおよそ1500名を数えており、初等教育拡充の措置にともない、その数は年々増加しつづけた。毎年およそ3000円から4000円ほどだった教育会の経費は、会費収入や台湾教育会から支払われる交付金のほか、主に州の補助によってまかなわれていた<sup>20</sup>。1933年には機関誌『台中州教育』が創刊された。『台中州教育』は、実際には定期的に発刊されていたわけではなく、毎年8号から10号ほどしか出されていなかった。一般的な教育論、教育活動の報道記事、教師の教学経験談、児童の作品が主な内容で、一期あたり50ページほどの分量で編集されていた。現存する最終号は1939年12月、第7巻第9号であるが、その誌面から停刊の知らせなどは見つからず、予想されない事態で停刊を招いたのか、それとも第7巻第10号以降のものが失われてしまっただけなのか、まだ確かではない。創刊から1938年4月の第6巻第4号まで編集を務めたのは、台中州教育課の職員だった加藤虎太郎である<sup>21</sup>。加藤が離職してからは、小林広三郎が現存する最終号である1939年9号まで編集を引き継いだ<sup>22</sup>。

台中州教育会が成立する前である1929年、台中州は「教室から教室へ」というスローガンをかけて、「教室で生まれた我等の研究は、再び生みの母たる教室へ還り、体験から原理へ、原理から実践へ」と還元されなければならないと主張したことがある<sup>23</sup>。1931年設立後には、過去2年間の活動経験をふまえて「教育實際化」というスローガンを掲げ、「教育更新五年計画」に着手した<sup>24</sup>。

5年におよぶ教育實際化運動の内容は、毎年州教育会に提出されたテーマに沿って、州下の各小公学校が研究会を組みそれぞれ研究発表を行なった後、年度の終わりに州の主催する實際化研究発表会で各学校が成果を報告をするという仕組みだったようである。通常、小学校と公学校と分かれて行なわれた報告会の内容は、その一部が『台中州教育』に掲載され今に伝わるが、それによれば、各年ごとに設定されたテーマは以下のとおりである<sup>25</sup>。

- 1931年から1932年：公民、地理、理科、農業の科目研究  
1933年：徳育、訓練  
1934年：学校経営（学級経営を含む）  
1935年：総合的な取り扱い

以上のテーマにもとづいた研究成果は、5年計画が終わる1936年まで台中州教育会によって次々と出版されたが、合計21冊に達するそれは、話し方と読み方から、修身、算術、国史、公民、地理、理科、農業、家事、裁縫にいたるまで、現場教師が授業ですぐに応用できるような科目別の教授手引きとして編集された<sup>26</sup>。これらの副教材が国家教育目標にしたがい、愛郷愛国の実現を目的にしていたことは言うまでもない。ただし、学校の教科目にあわせて編纂されたことで、これらの教材は郷土教育を進めようとする小公学校教師を大きく手助けできたのであり、この点こそが台中郷土教育運動が一定の成果を成し遂げられた理由の一つであろう。

では、この「教育實際化」とは具体的に言えば何だろうか。『台湾教育』の「各州庁の教育」のコラムは各州のアピールの場ともいえよう。そこで、台中州は「教育實際化」を紹介した。学校教育があまりにも装飾的なものであるとの批判があるので、教育を「役立つもの」にしたい、教育實際化には、教育の生活化ないし郷土化が含まれると述べた。具体的な目標と努力点としては国民性涵養、国語の習熟、情操の陶冶と実力の養成があげられた<sup>27</sup>。ここからは教育現場が「實際化」されていないという認識と同時に、州当局の主情主義的な郷土教育観も読み取れる。

先行研究でも指摘されているように、郷土教育の目標は愛郷心を培養し、それを愛国心にまで発展させることにほかならず、「教育實際化」をスローガンとする台中州の郷土教育運動においてもそれは例外ではなかった。たとえば、教育實際化の目標は「小さき郷土振興者」を育てることであるとする豊原女子公学校校長の山崎睦雄の考えは、1930年代日本内地の農村漁村振興運動の言説を連想させる。「小さき郷土振興者」は、第一に「世界に冠絶せる我国体の尊厳を自覚し報国の誠を尽し得る者」でなければならず、第二に、「強力な生活改善行者として郷土開発に貢献し得る者」であるべきだと主張する山崎の郷土教育観は、「郷土認識」から出発しそこから郷土愛、さらに郷土改造および郷土振興にまで結びつけて、最終的には国家意識を達成するというものだった<sup>28</sup>。似たような考えは、「教育の實際化は、郷土に出で郷土に還る。社会化し生活化し国家意識の体得に帰結する」、という加藤虎太郎のことばにも同じく現れる<sup>29</sup>。また、台中州の視学、錢目長三郎も5年計画を総括して、教育實際化の目標は「忠良な国民、有為な郷土民」を養成することにあると指摘する<sup>30</sup>。郷土愛と国家愛を同一視する見方は、日本人教育関係者に限らず、台湾人教師においても同様に見受けられる。たとえば、新任教師だった廖来興は、教育實際化の目的は国家社会に貢献できる「有用な人間」を養成することだとしている<sup>31</sup>。

とはいえ、例外がなかったわけではなく、一部の教師たちは、郷土教育の目的は愛郷心を育むことではあっても、愛国心を導き出すことではないと主張していた。たとえば、地理教育の實際化を検討した豊原公学校の教師、張崑山は、地理教育では地理の基礎概念および郷土理解を深めなければならないといい、「愛することは知ることから始まる」といわれるように、地理的な事実

事象を究明し、子どもに郷土自然や文化由来と現状を理解させれば、おのずとその愛郷心が育てられるはずだと主張する<sup>32</sup>。

同時期の日本内地では、郷土教育運動と生活綴方運動とが密接な関係を持っていた。日常生活の体験や感想を表現することで、教育の生活化と実際化を実践したわけである。この点、植民地台湾の場合は、台湾人児童の日本語のレベルの関係で、綴方教育の実際化に言及したのは小学校教師だけで<sup>33</sup>、公学校の台湾人教師は図画や工芸などの実践を重視していたのは注目すべきことである。

公学校教師で著名な画家でもある葉火城は、図画と工芸の科目における実際化を検討し、「郷土調査」のほかに「郷土の鑑賞」の必要性を主張した<sup>34</sup>。彼によれば、「児童が自己の自然的社会的環境を凝視し、鑑賞し、観察し、之を美的に正しく表現する事によって、郷土に対する鑑賞は深められ、それを愛する心に養はれて行く。この様にして培はれて行く鑑賞力創作力はより高き美を望み、より深き美を求めて、益々大きい力となって行くのである。従って其発達進展に応じて、今後の郷土を如何に発展せしむべきかについて、直接に又間接に働きかけ、郷土人の実生活の中へ深く喰い入り、美と実用との鑑賞眼を高め、生活をうるほし、且つ正しい文化を建設して行くのである」。同じく郷土調査の対象であるといっても、抽象的な芸術価値のほうに重きを置いていた葉火城からすれば、郷土の自然や風俗習慣、伝説言い伝え等は、創作のインスピレーション源になるからこそ価値あるものだった。葉火城によれば、「地理的理科的の調査でなく、図画手藝手工の立場から見る郷土の自然観察＝郷土の自然美、郷土の動物・郷土的植物に触れさせ」、「雑草の名を覚えたり、小魚の形態を描写したり、運動の状況を観察したりする事」によって、「それらに対して親しみを感じ、自然へ、郷土への愛情を深める」べきだったのである。

それだけではない。葉火城は子どもの絵を指導する際にも、年中行事、児童の遊び、学校行事、季節活動、風俗、歴史、伝説、地理、一般生活など、郷土の題材は無限に広がっているとみなし、特に鑑賞能力の培養を重視していた。「図画科の実際化は郷土の美を鑑賞し利用し、そして生活を美化するところの力を養ふ。その美を鑑賞する力は写生・想画・図案等の学習を通して育てられて行くが、尚それを深めるには鑑賞による体得が必要である。その対象は学級の児童の作品から学校全体におよび、更に近くの学校はもとより、全国、外国にまで、自己の製作体験を通して他の作品を鑑賞し、自己を発見し得る様にしたい」と考えたのである。

抽象的な美感の養成にとどまらず、葉火城は図画科の実用化可能性についても深く注意を払っていた。たとえば、郷土調査を行なう際にも、郷土物産の宣伝、包装、売り込みなどのために、図画科授業中に考案したポスターやラベルをうまく利用することこそが郷土愛の実際化であると指摘したほどである。葉火城にとってみれば、教育実際化とは郷土の経済振興という現実問題と切り離すことのできない関係にあったのである。

廖世深も同じく抽象的な美感の問題に注意した台湾人公学校教師のひとりである。手工の実際化に関する議論のなかで、彼は学習を生活化させ、郷土素材を活用すべきであると主張した。それによれば、まず学習の生活化とは、子どもの立場から言っておもちゃや遊びなど日常的な方法を通して、「思考力を鍛練し、創造力を養成し、美しいものを観察する能力をも養っていく」こと

にはかならない。郷土素材の活用と関連して、廖世深はまず郷土調査が先行しなければならないと指摘したうえで、単純な調査ではなく、活用と創作を想定した調査でなければ意味がないといい、その延長線上で手工科の意義を説き、子どもたちが自然に学習に興味を持てるよう、日頃から学生たちに創作に取り組みさせることで、最終的に郷土工芸の発展を導かなければならないと主張した<sup>35</sup>。

1930年代に日本内地で起こった郷土教育運動の背景には、1929年の世界恐慌の影響で、農村の窮乏が激化していき、大正新教育のロマンチズムが色あせたものと化していったことがある。それに呼応して教育の生活化が求められはじめたのだが、いかにして生活化の目標を達成できるのかについては異なる見解が現れた。1931年と1932年に、郷土教育関係者の間では2回論争があった。論争は、郷土科を特設するかどうかを中心に展開されたが、実はその背後には二種の郷土教育観があった。郷土科特設を主張する人々は、郷土科は科学的に、系統的に郷土知識を学習でき、これによってはじめて新しい郷土建設ができると考えた。それに対して、郷土科の設置ではなく各教科の教材の郷土化が必要だと主張する人々は郷土教育の目標は愛郷心の養成であり、そしてそれを愛国心の基盤にすることであると論じた。特設郷土科は単に知識伝授に陥りやすく、各教科にわたって郷土化を実践しなければならないとしたのである。前者は、郷土を一つの地方およびそれを豊かにする自然物であるにとらえ、自然的、客観的な角度から郷土を解釈しようとする立場で、当時の論者から客観的な郷土教育論と呼ばれた。一方後者は、主観的な郷土教育論とされ、その地域に居住する人間相互の関心、すなわち感情的要素を主として、歴史的、文化的、社会的な観点から郷土が解釈されるべきであると考えた。論争では特設派が優位を占めたが、文部省は、愛郷心と愛国心の養成をめざす主観主義的な郷土教育を支持する立場だったため、結局特設は実現しなかった。しかし、この論争をへてそれ以降の「教育生活化」の方向が確立されたといえる<sup>36</sup>。

台湾の教育関係者のうち、教育官僚や日本人校長という指導的立場にある人物、あるいは日本人教師が主観的な郷土教育に傾いていたのに対して、一部の台湾人教師が美術、工芸の郷土化、生活化などを訴えたことは、植民地郷土教育が諸刃の剣であったことを示している。台湾人教師が語った郷土教育、すなわち子どもの抽象的な美感や思考力、想像力、そして美的鑑賞力を養成しようとする教育方法は、「自己発見」に目標が置かれていて、現実の郷土の振興に注目し、客観的な郷土教育に傾いているようにみえる。しかも、このような能力の源となる郷土は決して国家のために存在するそれではなかった。郷土は広がっていけば確かに国家とはなりえたものの、彼らの視線は国家を通りこしてより広大な世界に向けられていた。このように、台湾人教師たちは州当局の推進する教育実際化のもとにおかれながらも、必ずしもその方向性に順応していたわけではなかったのである。

### 第3節 重層的な郷土像

前節では台中州の郷土教育運動における州教育当局の主張と意図を分析すると同時に、教育現場における台湾人教師の意向がそれとは必ずしも合致していなかったことも概述した。本節では、



郷土ということばの意味範囲および郷土調査を構成していた調査項目を通して、このような主張と意図が実際にはどのような郷土教育として実践されたのかを考察すると同時に、その実践のなかに垣間見られる「愛郷心」と「愛国心」の交錯しあう様相についても考えたい。

郷土教育運動が実践されたもっとも具体的な実例としては、郷土調査と郷土読本の編纂作業が取り上げられよう。もし児童の立場から見て直感的かつ具体的であるためには、郷土に基づかなければならず、また郷土に基づいて直感的かつ具体的であるものを見つけたり、労作教育を行なうためには、まず郷土に対する理解——言い換えれば、郷土調査が先行されなければならないからである。たとえば、豊原公学校の教師、張崑山は郷土調査を子どもの個性調査に例え、子どもを理解するためにその子どもの家庭を訪問し、個性や成長過程を理解するように、郷土理解も郷土調査から着手されなければならないと述べる<sup>37</sup>。台中州の視学、錢目長治郎も「郷土にタッチした教育——これが教育實際化に於ける一つの大きな狙所である。それにはどうしても郷土の真相を掴むことが先決問題である。この意味からいっても郷土の調査は、教育實際化上先づなさなければならぬ直接な仕事である」といい、同じ立場を堅持していた<sup>38</sup>。

郷土調査を行なうためには、調査対象の範囲——つまり郷土の範囲を確定することが先決であろう。先述した張崑山は豊原公学校の郷土調査の過程を紹介するなかで、郷土ということばの意味と範囲を明らかにしようとしたら、さまざまな異見が飛び交ったと指摘したうえで、以下のような解決策を提示した。

吾が郷土と看做すべき範囲は、吾が地方の土地の個性的特相から見て之に即して決定すべきもので、所謂郷土的でなければならぬ。本校の所在地豊原なるものを考察するに、豊原街一帯の中核地である、結晶地であります。商工業を主たる生業としてその他教育・政治・交通・経済の文化機関を具備した一都邑であります。（中略）故に、豊原を中心として豊原街一円の背後を繞る自然と人文を外にしては、豊原の存立と発展は考へられないのであります。換言すればこの一円の地域は、中核豊原によって統一された一つの有機体であって、これを一つの文化的地理区と看做すことが出来ます<sup>39</sup>。

つまり、郷土の定義が何種類あろうと、最終的には学校の所在地であると同時に、各種の社会機能を備えた有機体として自己完結性を具備する州郡市街庄こそ、実質的な郷土とみなすべきであるという。このような見方は豊原公学校にかざられたものではなく、同時期に出版された郷土調査や郷土読本からも同様に読み取れる。たとえば、嘉義市玉川公学校の郷土調査では、嘉義市を中心にその近隣地域と嘉義郡までを<sup>40</sup>、台中州海山郡漳和公学校では中和庄を<sup>41</sup>、台中州大屯郡北屯庄北屯公学校では北屯庄を<sup>42</sup>、また高雄市高雄第二尋常高等小学校出版の『郷土史』では高雄州を、それぞれ調査範囲として設定している<sup>43</sup>。現存する 19 冊の郷土調査および郷土読本を調べてみても（書籍や雑誌に掲載されている個別記事は含まない）、16 冊で学校所在地である市街庄を「郷土」とみなし、残り 3 冊でも「州」や「郡」が範囲となっている（表 1）。

表1 現存する郷土調査、郷土読本

	郷土読本のタイトル	編纂者	編纂年	郷土の範囲
1	豊原郷土誌	豊原公学校	1931	豊原街
2	我等の郷土	淡水尋常高等小学校	1932	淡水庄
3	郷土読本	新社公学校	1932	新社庄
4	郷土誌	北屯公学校	1932	北屯庄
5	郷土調査	南屯公学校	1932	南屯庄
6	郷土概況	玉川公学校	1933	嘉義市
7	郷土の概観	大甲公学校	1933	大甲街
8	郷土調査	北斗公学校	1933	北斗街
9	我等の海山	海山郡教育会	1934	海山郡
10	我が基隆	双葉小学校	1934	基隆市
11	鶯歌郷土誌	庄役場	1934	鶯歌庄
12	郷土史	高雄第二尋常高等小学校	1934	高雄州
13	郷土調査	八角林公学校	1934	獅潭庄
14	郷土読本 我が里	士林公学校	1935	士林庄
15	郷土誌	北埔公学校	1935	北埔庄
16	郷土資料	羅東公学校	1936	羅東街
17	郷土のしらべ	台中州教育課	1937	台中州
18	樹林郷土誌	張福壽編	1938	樹林庄
19	台南市読本	台湾教育研究会	1939	台南市

出典：筆者作成

清代以来の「郷土」が単純に生まれ育った土地を指す概念に過ぎなかったとすれば、1930年代「郷土教育運動」を経た後のそれは、さまざまな解釈によってのみ定義が定まるものとして、その範囲はいずれも1920年代の地方制度改正後の州郡または市街庄を指していた。1920年の地方制度改正は、各地域の自然的、人文的な要素をよく考えた上で行政区分を再編成したようであり、今日の行政区分にもその影響がうかがえる。残念ながら、この事業に関する全面的な研究はまだ現れておらず、断定的なことは言えないが、嘉義郡小梅庄（現在の嘉義県梅山郷）を一例としてみてみよう。地方制度改正により、もとの14の村があたらしい13区に再編成され小梅庄になった。「区」は原則的に自然村に基づいて区分されていたが、大きな集落が2、3区に分けられる場合や、一つの区が2、3村を含む場合もあったようである<sup>44</sup>。郷土調査の範囲は行政上の市街庄であり、この市街庄は自然村の基礎をもちながらも国家により新しく設置された新郷土であり、さらに新しい地名をつけられ、国家の行政系統のなかに位置を占めていた。『豊原郷土誌』<sup>45</sup>で調査された豊原街は、1920年に誕生した新郷土で、清代以来の揀東上堡でもなく、1919年以前の葫蘆墩區でもなく、まさしく地方制度改正で生まれた台中州豊原郡豊原街であった。先行研究では「愛郷はすなわち愛国」という前提のもとで郷土運動を考察してきたが、このような命題を成り立たせる根拠までは説明してこなかった。注目すべきなのは、「愛郷」の「郷」とは自然的な村としてのそれではなく、政府によって計画された行政単位としての「郷」であったために、行政区分として自由自在に拡大または縮小され、最終的にはもっとも大きい行政単位——すなわち「国家」へとつながりえた点であろう。

このようなロジックのもとで台湾で繰り広げられた郷土教育は、確かに「愛郷はすなわち愛国」という目標を達成していたと言えよう。ただ郷土調査と郷土読本では、子どもたちの「愛郷心」を涵養するために、みずからが属する郷土を全体の一部とみなし、ほかの地方と比較して自分たちが他者とどのように違うかを認識させ、子どもたちをしてみずからの郷土に帰属するアイデンティティを抱かせなければならなかった。たとえば、北斗公学校の『郷土調査』では、北斗街を自分たちの郷土と設定したうえで、北斗郡の他の街庄と比較し、北斗街に対する知識と親近感を学生たちに持たせると同時に、北斗街が北斗郡の一部であることをも確認していた。注目すべきなのは、確かに「街庄」としての「郷土」が合わさって州、郡像が、また「州、郡」としての「郷土」が合わさって「台湾」像が形成されていたものの、「台湾」全体を範囲とする郷土読本は存在しておらず、台湾を日本内地のほかの府県と比較するようなことはなされなかった点である。言い換えれば、想像される共同体の終点は台湾であった。総督府編纂の地理教科書で紹介される台湾は、その内部の行政区分とともに提示されているわけではなく、帝国内においては九州、四国、関東などといった地理単位と並置される地域であった。ゆえに、郷土誌や郷土調査のなかでの複数の小さい郷土が合わさった台湾は、すぐに帝国の行政枠組にはつながらなかった<sup>46</sup>。郷土調査と郷土読本の「郷土」想像は、教育当局の意図していた「郷土」像に必ずしも合致していたわけではなく、おたがいの間で一定の食い違いが生じていたのである。

表2 「郷土の歴史」調査項目

矢口卯兵	張崑山	『豊原郷土誌』
大砲の研究	—	—
煉瓦工場の研究	—	—
郷土かるた	—	—
祖先の研究	—	—
位牌の研究	—	—
祖先の歴史に関する研究	—	—
墓場の研究	古跡古墳	古跡古墳
郷土先賢偉人、記念碑の研究	旧家とその人物	旧家並人物
二林の伝説	伝説（歌謡）	伝説口碑
—	郷土の沿革	郷土の沿革
—	廟	廟
—	街の変遷	街の変遷
—	地名の起源	地名の変遷
—	口碑写真考古品史料	写真
—	伝説歌謡	歌謡
—	市街地の変遷地域図示	行政区域の変遷
—	—	豊原郡役所の変遷

出典：筆者作成

重層的な「郷土」像は、郷土調査の項目からも確認される。『台中州教育』には郷土調査の調査項目と関連して、二林公学校の日本人教師、矢口卯兵および前述した豊原公学校の台湾人教師、

張崑山がそれぞれ記事を掲載している<sup>47</sup>。一見すると、矢口が提示する「地理の郷土」「歴史の郷土」「風俗習慣」「自然科学の郷土」「教育の郷土」「宗教の郷土」「政治の郷土」「経済の郷土」「衛生の郷土」「美術の郷土」からなる10個の調査項目に対して、張崑山は「郷土の歴史」「郷土の自然」「郷土の土地」「郷土の人々と労働」「郷土の産業」「郷土の交通」「郷土の経済」「郷土の行政」「郷土民の生活」「郷土衛生」の10項目を取り上げており、両者は大差ない。どちらも基本的には清代以来の地方志編纂を受け継いでいるように見受けられる。しかし歴史に関する部分には、両者のあいだに違いが見られる。表2は、この両者の「郷土の歴史」の調査項目と、張が勤めていた豊原公学校による『豊原郷土誌』のなかの「郷土の歴史」の項目である。

矢口があげた九項目のうち、「祖先の研究」「位牌の研究」と「祖先の歴史に関する研究」は類似しており、さらに「墓場の研究」を含めて、個人の家族の歴史とかかわっている。台湾の漢民族も祖先祭祀を重視するが、郷土調査の際に、矢口が家族の歴史をこれほど重視しているのは、注目すべきである。二林公学校の郷土調査がその後完結したのかどうかは確認できないが、ここからは、明治以降の日本において、「家」をめぐる祖先崇拜が「家族国家」観を介して愛国心へと導かれていったことを連想させられる。郷土の人物については、矢口、張とも言及しているが、矢口が記念碑とともに該当人物を列挙しているのみなのに対して、張は「旧家とその人物」で、具体的に林振芳、潘氏（敦仔）一族、張氏（達京）一族を列挙している。実際、『豊原郷土誌』を見てみると、これら3つの家族のくわしい説明がなされており、同書全体の十分の一近くのページを費やしている。このほか、矢口の「大砲」「煉瓦工場」は歴史と関係がないわけでもないが比較的「非歴史的」だとも思われる。「郷土かるた」は郷土の物語などがかるたに描かれたものだが、日本語のレベルの関係もあって、郷土の人々が誰でも楽しめたわけではないだろう。一方、張があげている「古跡古墳」は、矢口が取り上げているような家族の「墓場」ではない。『豊原郷土誌』によると、豊原の旧名「葫蘆墩」は、同地にあった3つの丘と、清朝時代の械闘にかかわる古墳に由来しているという。張が廟と自然村の小地名の起源や変遷などを重視しているのも矢口には見られないことであった。ただ、2人とも言及した「伝説口碑」には、民俗学の影響が見られると言えよう。

総合的にいえば、張崑山のいう「郷土の歴史」は具体的な内容となっており、矢口が個人の歴史に重きを置いているとすれば、張が記述しているのは地方共同体全体の集団記憶である<sup>48</sup>。張は調査項目は大体文部省社会教育官千葉敬止氏の考案に依拠しており、実情に応じて多少調整したと述べている。張自身がとくに強い郷土意識をもっていたとは必ずしも言えないが、郷土の歴史を見つめる際、矢口などとは異なるまなざしが張にはたしかに存在していた。

郷土誌の内容に郷土史が占める割合について統計調査を行なった詹茜如は、郷土史の比率がかなり少ない点を指摘し、この時期の郷土教育は現代化された郷土像の創出に重点が置かれており、台湾郷土史はそれほど重要視されていなかったとする<sup>49</sup>。歴史を語る郷土教材が存在していなかった点を強調した周婉窈も同じ見方を示しており<sup>50</sup>、本稿もそれに反対するわけではない。ただ郷土調査の項目から判断するにせよ、歴史のほかにも伝説、旧跡、年中行事などがかなりの割合を占めていたことを忘れてはならないだろう。たとえば、嘉義市玉川公学校の郷土概況には、歴

史以外にも史蹟名所や歴史的人物、伝説および年中行事等の章が設けられており、北港朝天宮、紅毛井、保生大帝、阿弥陀寺など9項目の伝説も含まれている。漳和公学校の郷土調査にも旧跡名所、風俗習慣等の章が設けられているほか、教師が対象項目ごとに行なった調査をもとに編纂された北屯公学校の郷土誌には、宗教状況という章が設けられ、福德祠、大衆廟等20数か所の古廟ごとに、新暦の国家祝祭日と旧暦の民間の祝い事が同じ行事暦の中に一緒に年中行事として書かれている。植民地統治者たちが創造しようとした郷土台湾像は歴史からは距離を置くものであったが、このような日常生活にもとづいた調査項目は郷土に歴史的深みを与えていたのである。

台中州の出版物ではないものの、高雄第二尋常高等小学校が出版した『郷土史』は、当時「郷土史」というタイトルで編纂された唯一の郷土読本として、とりわけ注目に値しよう。「台湾通史」と「高雄州地方史」の二つの部分からなる本書は、それぞれ無所属時代、蘭領時代、鄭氏時代、清領時代および帝国領有以後という時代区分によって記述されているが、1934年という出版年度や「郷土史」というタイトルから判断して、1930年代の郷土教育運動の産物とみなせよう。すでに指摘したとおり、植民地統治者たちは、郷土認識が児童の愛郷心だけではなく、愛国心をも養成することを期待していたものの、台湾が郷土の単位となってしまうと、台湾アイデンティティーの助長につながりかねないという懸念を同時に抱いていた。したがって郷土教育は、総督府や全島レベルの台湾教育会ではなく、あえて地方州庁以下の行政単位をその担い手とし、植民地人民に祖国に対するノスタルジアを連想させないために、あえて歴史とは距離を置いて日本統治がもたらした郷土の現代化だけを強調するという教育内容を組んだのである。しかし、これらは植民地の被植民者に対する考慮に過ぎず、植民地に居住する統治者のことまでが熟慮された措置ではない。満州の日本人小学校が『満州補充読本』などの教材を編纂し、満州やモンゴルの歴史を詳しく教えていたことから察せられるように<sup>51</sup>、統治上の方便のためにも植民地の統治者たちに当地の歴史知識を知らしめる必要があったのである。前述のように二林公学校にしても豊原公学校にしても、対象は公学校の台湾人児童であり、郷土調査をするときには民俗学的手法に近い方法がとられたのに対して、台湾小学校の日本人児童に対する郷土教育には、「歴史的」な手法がむしろ必要であった。

## まとめ

1930年代台湾における郷土教育運動は基本的には、同時期の日本内地のそれと同様に、教育認識を通して郷土を改造、振興し、愛郷心を愛国心へと格上げすることをめざしたものである。ただそこには、統治上の方便のために、台湾の中央文教当局ではなく、地方州庁を担い手にしていたという、台湾特有の特殊性も認められる。そして、実際に調査に従事するのは、小公学校の教師だった。植民地の地方教育当局が提起した郷土教育の実質的内容である教育実際化運動は、各科目の教材を通して郷土化を進め、総督府の意図を補強した。ただ、郷土教育はそもそも諸刃の剣であった。台湾の郷土教育の指導者は、郷土教育により愛郷心を養成して愛国心の基盤とすべく、主観的な郷土教育に傾いたが、一部の台湾人教師が、美術、工芸の郷土化、生活化を現実の

郷土の振興につなげていこうとした。1930年代の郷土教育運動のもっとも重要な実践的成果としては、郷土調査と郷土読本の編纂があげられよう。そのなかで、「郷土」の範囲は市街庄など行政単位を基本に設定されており、郷土調査の項目として歴史のほかにも日常生活の多くの側面が素材となっていた点は注目に値する。行政単位の可変性を介してはじめて、「愛郷はすなわち愛国」というロジックが可能になったのであり、また日常生活の調査を介してはじめて、歴史性を奪われた「郷土」もある種の「歴史的深度」を持つことができたのである。植民地とはいえども「歴史性のある郷土」は確かに存在しえた。ただその「歴史性のある郷土」は植民地の統治者のために存在しただけである。植民地統治のもとで行なわれた郷土教育運動のなかで、「郷土」が持つ重層性と多元性は、ここからも垣間見ることができよう。

1930年代前期台湾の郷土教育運動は、時期的には短かったが、各地の小公学校の教師と児童たちが相当に動員された。そして、生活化、実際化された教育は当時公学校教育を受けた人々の脳裏に深く刻まれたようである。詩人林亨泰は1931年に公学校に入学して、1年の二学期に北斗公学校に転校した。彼は公学校時代の生活教育、労作教育に強く印象づけられた。そのときは就学している学校が郷土調査に取り組んでいることは知らなかったが、戦後何十年も経って、偶然に北斗公学校の『郷土調査』に出会ったとき、自分が受けた生活教育や労作教育がこの郷土教育の流れからきたものであることがはじめてわかった<sup>52</sup>。もっとも、日本内地と同じく、台湾の郷土教育運動の議論も活動も、1934年以降急速にトーンダウンし、1930年代後半にはあまり活発な活動は見られなくなった。そして、1941年国民学校開設後、4年次に「郷土の観察」という新教科が設けられた。「郷土の観察」は科学的な方法で郷土を観察すべきと主張しながら、郷土の観察で愛郷心と愛国心を連結させようとする主情主義の郷土教育論も継承した。民間の日、台人が『民俗台湾』グループを結成して、台湾の民俗や歴史の調査に尽力していたのもちょうどこのころである。その精神や方法は、1930年代前半の郷土教育運動と似ているところがあり、小公学校の教師も参加していた。戦後、その『民俗台湾』の精神を受けついで発行された『台湾風物』は、戒厳体制下の唯一つの台湾民俗、歴史を研究するメディアとして成長してきたが、ここからも1930年代郷土教育運動の成果の一つとすることができるかもしれない。

## 注

※ 本稿は台湾国家科学委員会の奨励による研究計画「日治時期台湾「郷土」的創造与動員(1930-1945)」(奨励番号 95-2411-H-134-001-MY2)の成果の一部である。

- 1 徐崇嵐「〈郷土〉如何論戦?—一個場域与権力的分析」(清華大学社会学研究所碩士論文、2003年)。
- 2 詹茜如「日據時期台湾的郷土教育運動」(台湾師範大学歴史所碩士論文、1993年)。
- 3 呉文星「日治時期台湾郷土教育之議論」『郷土史教育學術研討会論文集』(台北、中央図書館台湾分館、1997年)。
- 4 周婉窈「実学教育、郷土愛与国家認同——日治時期台湾公学校第三期『国語』教科書的分析」『海行兮的年代:日本殖民統治末期台湾史論文集』(台北、允晨、2003年)。
- 5 「郷土」というキーワードで台湾文献叢刊データベースを検索すると、およそ50件に上る検索結果が得られる。ただし、連雅堂が『雅言』にて1930年代郷土文学論を考察した9件の資料を除けば、残りはすべて清代以前のものである。たとえば「令各回郷土」「保障郷土」等であり、なかに

- は重複するものも少なくない。
- 6 黄石輝「所謂「運動狂」喊声——給春栄克夫二先生」『台湾新民報』967-969号（1933年10月）中島利郎編『1930年代台湾郷土文学論戦資料彙編』（高雄、春暉出版社、2003年）404頁所収。
  - 7 むろん1930年以前の台湾の出版物に「郷土」という表現がまったく見あたらないというわけではない。たとえば詹茜如の前掲論文では、1915年に沙轆公学校が出版した『沙轆支庁管内郷土資料』が紹介されている。
  - 8 最初の論文は吉松比古詩「郷土に立脚したる農村公学校終学年学級経営の実際」（『台湾教育』333号、1930年4月）である。それから、「郷土に活躍する青年」（『台湾教育』351-353号、1931年10-12月）、「青年団を中心とする郷土の改善」（『台湾教育』359号、361号、1932年6月、8月）がある。ちなみに、後者は文部省青年教育課長の講演記録である。
  - 9 「郷土」という二文字をタイトルとしないまま郷土教育を内容とする文章もあったかもしれない。ただしこの種の文章は多数ではなく、かつ本稿の論述に決定的な影響を及ぼすわけでもないので、ここではこれ以上深入りしない。
  - 10 その一部が詹茜如の前掲論文中に引用されているが、筆者は脱稿まで現存する場所を確認できなかった。
  - 11 たとえば、新竹州の八角林公学校（現在の苗栗県獅潭郷の豊林国民小学校）に、1934年版の『郷土調査』の謄写版が残されており、台中州の北斗公学校（現在の彰化県北斗鎮北斗国民小学校）にも1931年から編纂された『郷土調査』が現存する。特に毎年新たな資料が補充されつづけた後者は、2003年に彰化県文化局によって翻訳出版された。
  - 12 「郷土教育論争〔解説編〕」、久木幸男等編集『日本教育論争史録 第二巻 近代編（下）』（第一法規、1980年）337-338頁。
  - 13 帯刀校長「私の学校の郷土教育に対する態度」漳和公学校編『都市に近接せる農村の郷土教育』（漳和公学校、1935年）5-12頁。
  - 14 新庄輝夫「本島教育と郷土教育」（『台湾教育』381号、1934年4月）。
  - 15 たとえば、張崑山「郷土的取扱の地理学習」（『台中州教育』4号、1933年4月）は、郷土教育連盟の小田内通敏の著作を引用している。
  - 16 もうひとつの手がかりとしては、郷土教育連盟の刊行物や関連人物の著作物などが挙げられよう。この類の資料は現在も台湾各地の図書館にかなり多く保存されており、ここからも当時の流通量のほどをうかがい知ることができる。
  - 17 伊藤純郎、『郷土教育の研究』（思文閣、1998年）第一章。
  - 18 周婉窈、前掲論文、262-273頁。
  - 19 詹茜如、前掲論文、58頁。
  - 20 台中州教育会の会費は一人あたり毎月10銭だったが、内8銭は台湾教育会が補助していた。また州の補助額は、1932年度と1933年度ともに毎年1000元である。『台中州教育年鑑』（台中州教育会、1933年）21頁。『台中州教育年鑑』（台中州教育会、1934年）3頁。
  - 21 加藤は曙公学校の教師であったが、『台中州教育』で発表した文章の所属先はすべて台中州教育課兼職と記している。彼はこの間「花塘生」というペンネームを用い、巻頭のことばや編集後記、「教育春秋」などのコラムを執筆するなど、同誌にとってもっとも重要な役割を果たした人物だといえよう。
  - 22 小林は村上公学校教師だが、州教育課の職を兼職していたわけではない。
  - 23 「台中州教育の展望」（『台湾教育』373号、1933年8月）89頁。
  - 24 花塘生「教育實際化五箇年の前後」（『台中州教育』4巻3号、1936年3月）2頁。
  - 25 同上。
  - 26 台中州教育会『台中州教育の展望』（台中州教育会、1935年）61-63頁。
  - 27 「教育實際化の方法原理」（『台湾教育』373号、1933年8月）90-93頁。この文章には署名がないが、高橋金四郎（村上公学校長）「教育實際化と学校教育」（『台中州教育』1号、1933年1月）と同じ内容である。
  - 28 山崎睦雄「私の考へてゐる教育實際化」（『台中州教育』1号、1933年1月）。
  - 29 「巻頭」『台中州教育』5号（1933年5月）。
  - 30 『台中州教育』4巻3号、1936年4月、13頁。
  - 31 廖来興（村上公学校）「（台中州教育筆談会）教育實際化を覗く」（『台中州教育』2巻1号、1934

- 年1月) 34-35頁。
- 32 張崑山「郷土的取扱の地理学習」(『台中州教育』4号、1933年4月)。ほぼ同じ文章が『台湾教育』の「各州庁の教育紹介」シリーズにも見られる(『台湾教育』373号、1933年8月)。
- 33 たとえば、野村藤作(二水尋常小学校長)「手紙文に躍る児童の生活」(『台中州教育』4号、1933年4月)。
- 34 葉火城(豊原女子公学校)「図画の生活化と工藝重視」(『台中州教育』4号、1933年4月)。
- 35 廖世深(東勢公学校)「手工科の実際化」(『台中州教育』10号、1933年10月)。
- 36 前掲「郷土教育論争〔解説編〕」336-346頁。
- 37 張崑山「我が校の郷土調査」(『台中州教育』4号、1933年4月)。
- 38 錢目長治郎「教育實際化の歩みの上に」(『台中州教育』3号、1933年3月)。
- 39 張崑山、前掲論文、50頁。
- 40 玉川公学校『郷土概況』(玉川公学校、1934年)。
- 41 游阿喜「郷土の展望」『都市に近接せる農村の郷土教育』(漳和公学校、1935年)。
- 42 北屯公学校『郷土誌』(北屯公学校、1932年)。
- 43 高雄第二尋常高等小学校『郷土史』(高雄第二尋常高等小学校、1934年)。
- 44 李若文、「日治台湾的自治行政(1920-1934)——以小梅庄為例」(『淡江人文社会学刊』13期、2002年12月) 59頁。
- 45 豊原公学校『豊原郷土誌』(豊原公学校、1931年)。
- 46 公学校の地理教科書に関しては、許佩賢「塑造殖民地少国民——日拠時期台湾公学校教科書之分析」(台湾大学歴史研究所修士論文、1994年)、第四章を参照。
- 47 矢口卯兵「我が校の郷土調査」(『台中州教育』1年、1933年1月)。張崑山、前掲論文。
- 48 しかしながらこの例だけでそのまま、日本人教師と台湾人教師とのあいだで、郷土意識あるいは郷土教育に対する見解が食い違っていたと結論づけるわけではない。実際、鹿谷公学校の日本人教師を勤めていた並木直人は「歴史伝説」「宗教素材」「教育行政」「経済産業」「交通風景」「地勢気候」の項目に分けて「本校郷土かるた」なる記事を書いたが、なかでも「歴史伝説」と「宗教素材」の項目には福德廟、孝子節婦碑など歴史史蹟や人物伝説などが盛り込まれており、共同体の集団記憶に関わる内容にも触れられていることが分かる。肝心の点はそれを記述する視線にあるといえよう。並木直人「本校郷土かるた」(『台中州教育』1号、1933年1月)。
- 49 詹茜如、前掲論文、52-53頁。
- 50 同上論文、52-53頁。
- 51 磯田一雄「在満日本人教育におけるアイデンティティ論——「満洲郷土論」の意味を中心に」(『東アジア研究』45号、2006年)、39-53頁。
- 52 林亨泰作、林中力訳、「日本殖民下の大正経験(一)」(『台湾文学評論』4巻4号、2004年10月) 263-264頁。